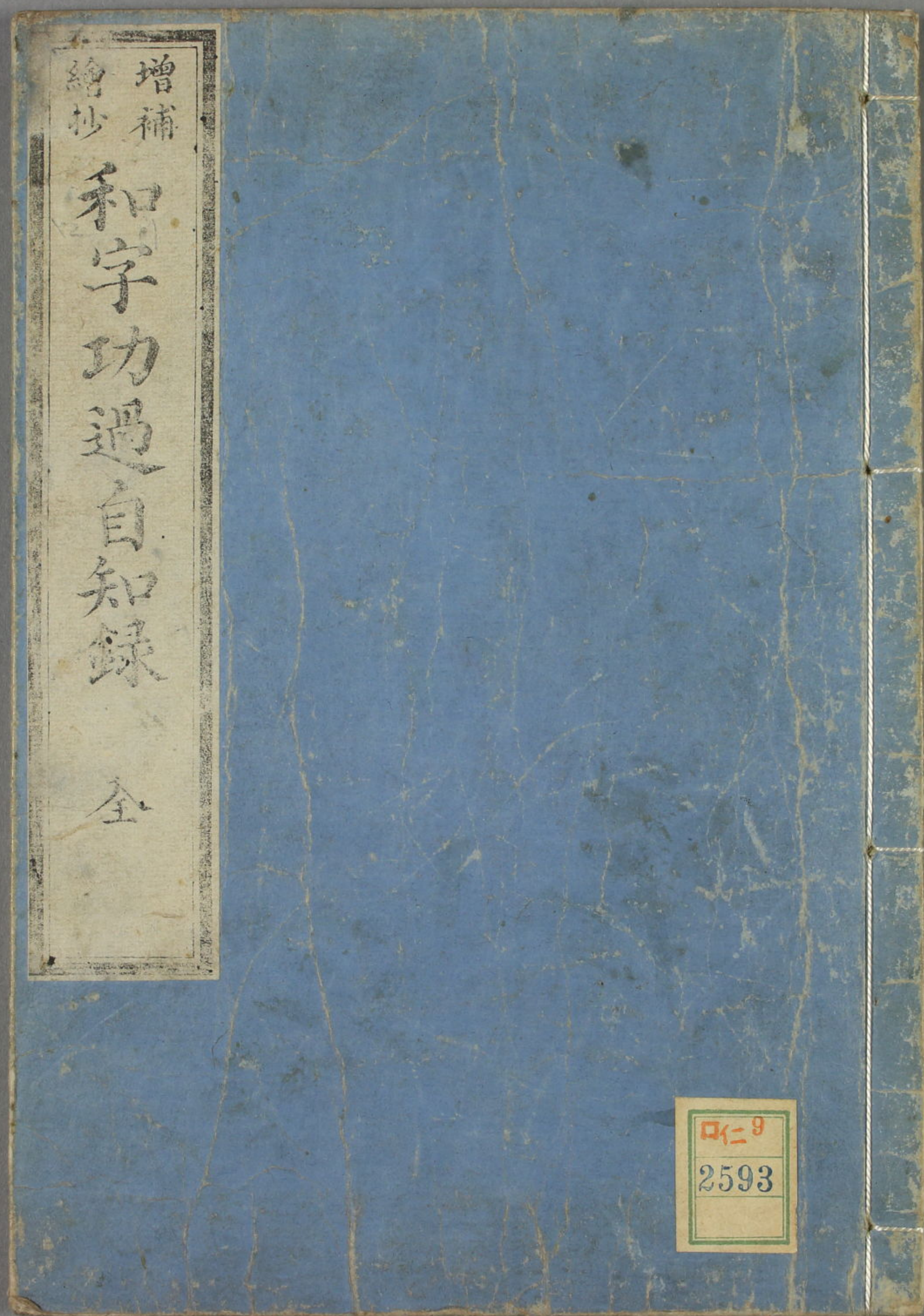


仁
號 2593
卷

和字功過自知錄敘

有客懷一編來出呈之余。且徵序曰。此書本袁了凡功過格。雲棲大師自知錄。依其條例。摘其切要。名曰功過自知錄。著以國字譯言者。欲令閭婦癡童易通曉。而受持信行也。余披閱之。視其立條分事。各品功過。絲善髮惡。舉而不措。戒惡勸善。循循然誘人親切。乃感歎不輟。因謂功者。積善以成功德也。過者。過惡也。其戒惡移善。也要在日記功過。月較多寡。而審己所行如何耳。過多心慚。則惡不忍爲。功多情喜。則善

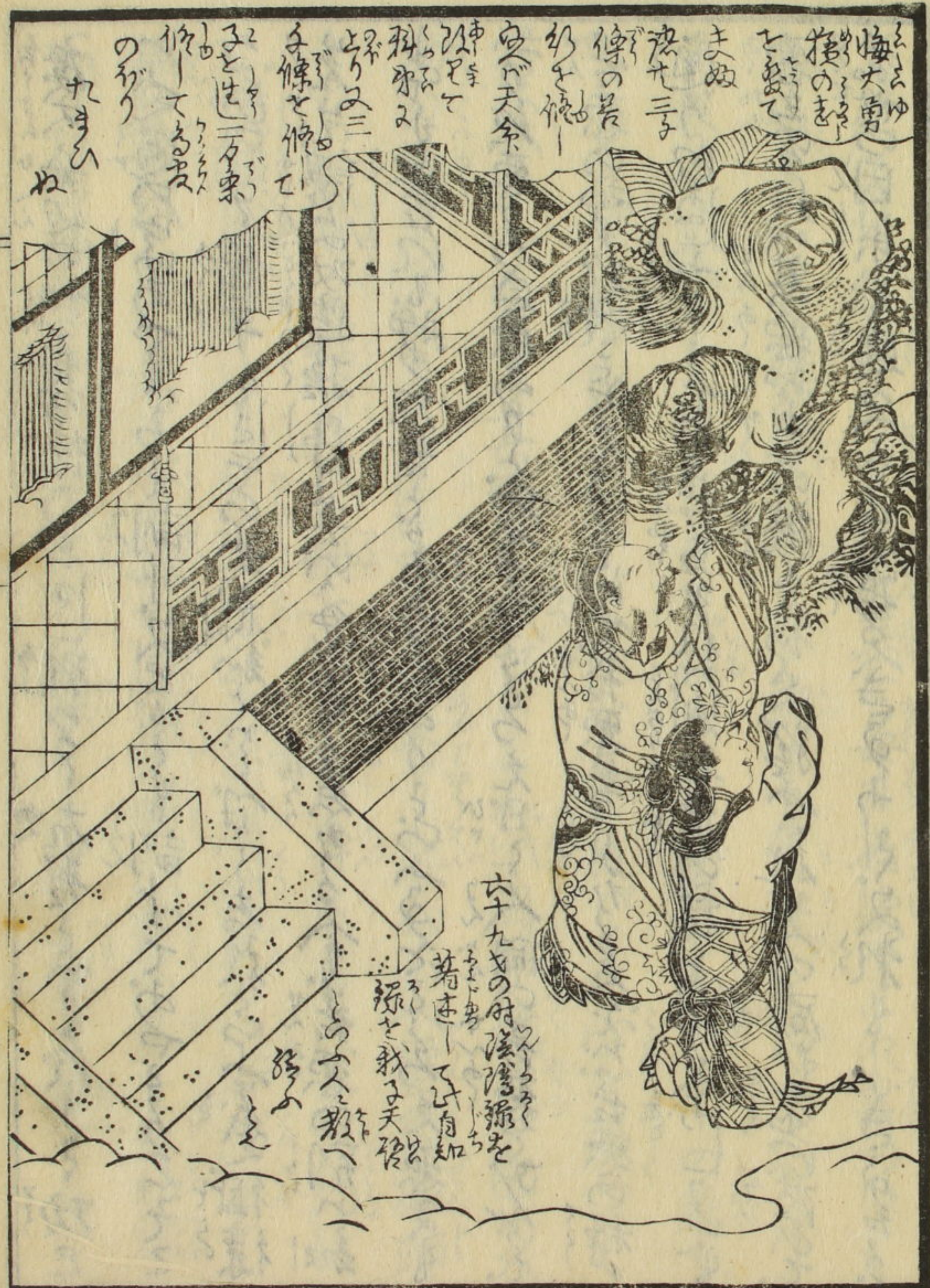
不能不爲己所行日自知而自能戒移皆由省身正
心發誠欲踐善行道者舍此復何求也其言云爲善
者獲福爲惡者罹禍是天之定理宐然也曾子曰出
乎爾者反乎爾者也孟子曰禍福無不自己求者則
善惡己之所出而禍福反得于己也則無非自求而
得之矣由是觀之爲人除害救患者己逭凶孽育生
戒殺者享福祥也世之求富貴利達者亦不由是道
何以得志乎今也人知取之爲取而不知與之爲取
也且不悟貨悖而入者亦悖而出之理貪吝頑忍唯

貨財之營而鮮有恩恤也儻此書得博行于世而人
人受持信修孜孜日化家以及鄉延達邦國則廉恥
之風興而謙讓之道立富者知足而窮者安生國無
偷盜而民德歸厚雖姦邪殘賊之人亦有恥且格焉
嗚乎其功偉然不亦大乎余嘉慕之間其述者姓名
不顯言之蓋此紀藩世祿達官之士而今旣致仕其
爲人也遜謙不好聲聞資性慈惠常散財布恩以周
人之急因思吾財也有限而乏者也無限以有限隨
無限難也已不若使人遇惡修善避禍致福自享天

[illegible]

和字以通自知

[illegible]



廣大無辺の利益功德の多し。然るに我々といふは、功と
いふ過の字あやまちと訓どふとがとも訓どてあやまちをそこ
ろひのりて悪事をほしてのち自知といふがうきれとて我之祖徳
先生譚文功過格序に云い、やうなる悪する人も善悪の別は加
へずとも善のゆかりは善なるき善ありふとてさうえ悪も
かりて悪なるき善ありふとてさうえ日々人間の善悪をかんぐ
る善悪のちがれ様をさうりつけて善悪等もなる人といひ善悪の秤
通りにはがし、それも善なるれば則ち善の報とあらはし、これも
悪なるれば其善の報の端をへり、善なるべし人の励むべきはひて
我々の因果も過るべきとて悪なるき善なるきふとて、又れもさうなる

と云ふ。これば我身のゆひの善悪を毎日格致のよみ書つけく
自知といふは、縁の字のあらんと訓どて、他縁もふことなり。
さうてもいさうれ善のりも、獲れたる大善とあらうの悪も、
かゝるときは善とあらむひし、大善とあらむとて、心と改めく
善なるさうなるも其善も滅せざらん、げ自知縁其にじめる
功と格致といふに、ろに大明の表了んとて、人雲名禪師
といふ知識より、功と格一冊を授て、自身より、そとあらひ
て、諸願成就せしより、陰陽縁、又善悪慶殃篇とて、功と十一
品の格致を、しめり。雲棲の蓮池大師、け書の名を自知縁と
いふたれ、ひて、善門道門の八類をまけて、善く化あり。

自新錄上卷

古杭雲棲寺
徐宏輯

吾門

忠孝類

二 父母つるやむいゝよき事サマ 一日
一 日

○又母のしきぢとまりりてそむく事

○又母のさういふ限えんのうぎうの志こころをほくは

○父母といふは大道をさるるびく

○又母又佛法をまゝめりてひく 一孝

継父母 ついでちち
 継父母 ついでちち
 舅姑 あうとあう
 舅姑 あうとあう
 父の母 父の母
 父の母 父の母

君又決之憲とてし
勅る一日

○若道をさるゝ一人と利益を二倍 ○一方と利益は十倍

○天下と利益を二倍 ○天下後世を利益を百倍

一國王の御按をまりんそむり倍 一事

○九一切のふは美実にして欺くふるきい 一事

一師匠ふい多長しう人ふたうやまふ 一日

○師のふたをうへをまりりてそむり倍 一事

一兄をうやまひ分と愛を二倍 ○黒父母の兄を二倍

仁義類

一ちりれ候を救ふ 一人

○ちりれ病を一人 ○薬をかかていへ 一服

○五塚の病人を治さるう中ふいふをうけ 一人

但一礼物をうけられ居ふあり倍

一記罪より者へのちをさるゝ一人 ○よき教人 一命

ちりさば一人 ○杖刑をさるゝ一人 ○答刑をさるゝ一人

但まふいふをさるゝ礼物をうけられ居ふあり倍

○義理にききうううに私又さるゝ居ふあり倍

一子を溺らるゝを救ひ中ふ 一命

○子を溺らるゝを救ふ人といふんてふむ 一命

○棄子にまらふ 一命 ○胎子を母に返さるゝ 一人

一牛馬等の人ふなるけり命をさるゝ 一命

十一
十

一令

一十

なり

余長

上二回

一人

十一
目

一命
又

一 老^{さい}子^こち^ちつ^つ初^{はつ}ガ^ガし^して^て又^{また}う^うき^き者^{もの}越^こして^てた^たの^のむ^むあ^ある

き^きん^んき^きう^うれ^れ人^{ひと}を^をと^とる^る 百後 ○ま^まぐ^ぐの^のや^やこ^こー^ーも

後^{あと}て^て 百後 ○米^{こめ}麦^{むぎ}布^ふ本^{ほん}綿^{わた}の^の糸^{いと} 上はく後より多用

○お^お族^{ぞく}中^{ちゆう}を^をえ^えト^トま^まじ^じき^きを^を周^{しゅう}に^にあ^あら^ら乃^の憲^{けん}雅^やと

た^たま^まけ^け又^{また}我^{われ}お^おに^にえ^えく^く出^でる^る者^{もの}又^{また}と^とる^る 日

○上^{かみ}の^のお^おと^とた^た國^{くに}窮^{きゆう}れ^れ人^{ひと}を^をは^はき^きゆ^ゆり^りま^まる^る 一日

一 人^{ひと}の^の憂^{うれ}ひ^ひを^をた^たし^しめ^めく^くつ^つひ^ひる^る 一

一 凶^{きん}事^じ又^{また}米^{こめ}の^の虫^{むし}咬^{くは}る^る利^りと^とる^る代^{しろ}賣^うれ^れ 百後

一 饑^うる^る人^{ひと}を^をと^とる^る 一食^{しょく} ○煩^{わづ}渴^{かつ}する^る人^{ひと}又^{また}湯^ゆ茶^{ちや}と^とる^る 十飲

○あ^あら^らえ^えと^と人^{ひと}を^をあ^あら^らえ^え 一宿^{しゆく}せ^せむ^む 一 ○綿^{わた}入^{いれ} 一

不^ふど^どと^と 一 ○や^やの^の後^{あと}ま^まて^てう^うち^ち人^{ひと}明^{あき}松^{しょう}を^をと^とる^る 一人^{ひと}

○雨^{あめ}ふ^ふる^るに^にあ^あま^まく^くを^をと^とる^る 一日^ひ

一 急^{いそ}げ^げど^どの^の食^{しょく}を^を不^ふど^どと^とる^る 二食^{しょく}

一 か^かかる^る金^{かね}銀^{ぎん}を^をゆ^ゆる^る 百後

○年^{とし}々^々利^り足^{そく}と^とる^る上^{かみ}に^にく^く其^{その}人^{ひと}を^をた^たし^して^てと^とる^るに^にり^りじ

か^かた^たを^をと^とる^る 二百^{ひゃく}後^ご

如^{ごと}う^うつ^つへ^へ願^{ねが}ひ^ひされ^れど^ども^も滞^{とど}まり^りて^てせ^せひ^ひる^るく^くゆ^ゆる^る

の^の苦^{くる}み^みあ^あら^ら 一日^ひ

一 殺^{ころ}す^すと^とる^る人^{ひと}ま^まふ^ふト^ト人^{ひと}半^{はん}馬^ば等^{どう}の^の疲^{つか}れ^れに^にむ^むと^と由^{よし}に^に

或^{ある}代^{しろ}り^りて^て息^{やす}む^む 一時^{とき}

一 葬れをみるにうらるき人ふんどこい 百後

一 捨る人の骨を葬る 一人 ○ 捨る屍體を葬る 一人

○ 墓のるき人ふ、墓地をやどじて葬ら 一人

但 年貢をとくは、昔にあり

○ 旧跡の古墳と再興 一 或は法界の塔と建る 入用

一 かけもちどろもちなど、城はうりて、往來の 一 中をれり

に、馬へ用 百後 ○ 木のたけけと、堀地を、戸を、堀やと

不残して、往來の橋を、け、後 一 船を、け、る 月

但 賃後とるりの、る、昔にあり

一 上官 一人 へ、車 一 機 一 も、ろを、あり、れ、む 一人

○ 道 あやま ちありとも、晴 くろ ふ、あり、れ、そ、其、後、後 あやま と、金 あやま 勅 あやま 一 あやま

但 納 ない 後 い へ、う、る、れ、る、る、み、あり、け あやま ○ 凡 あやま 上 あやま へ、人 あやま

トを、老 あやま の、ぎ、雇 あやま する、は、日 あやま ド あやま 是 あやま

一 民 あやま と、刀 あやま 居 あやま る、二 あやま 目 あやま だ、ど、唯 あやま そ、こ、り、ん、の、と、思 あやま ら、れ、べ あやま

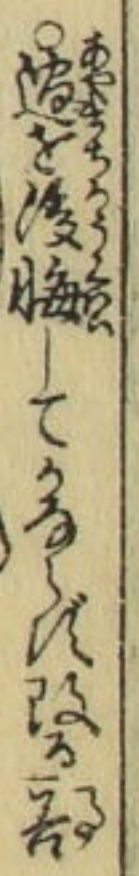
一 妾 あやま を、つ、と、ま、さ、る あやま ○ 日 あやま ド あやま 嫁 あやま 入 あやま せ、れ、ば、入 あやま 用 あやま

○ 男 あやま 女 あやま を、ば あやま 其 あやま 代 あやま 根 あやま と、る、り、元 あやま 根 あやま

○ こんきう あやま 人 あやま び あやま た あやま と、旁 あやま と、刀 あやま 居 あやま る、金 あやま 根 あやま を、出 あやま せ、る

く あやま 一 あやま 中 あやま 日 あやま ド

母は仕へや
まひてすく
中一
おの一日
こころ
おの
戻公彦
中一
一ヶ月別
よん
但一お入
も一母の
心よりさび
病がれが
男の中へ
おの業を
由りな
張勤る一
長

[illegible]

三寶功徳類

- 一 佛菩薩祖師の像をこんまうする入用 百後
- 一 諸天聖人賢人の像をこんまうする入用 二百後
- 一 さいらん修禪をとれ 旧く例して
- 一 經律論を板行する入用 百後 ○二乘人天の書 二百後
- 一 印施 但 何れいふを賣りのまうするあつて
- 一 堂塔寺院を建てる 佛具法器等を寄進する 百後
- 一 地を寄附する地代 百後 ○諸天鬼神の廟社 二百後
- 一 焼香らうそく 他等 をくかうする 百後
- 一 菩薩の大戒を受る 四十後 ○小乘戒 三十後

○十戒 二十後

○五戒 十後

- 一 大乘の經律論を註釋せば 一卷 卷數多くとも
- 二乗抄よりびん天の書 十後
- 卷數多くとも 三百後

但 己がひがれ見識しまりせういふ 非

- 一 自己に佛法の書と著述せば 一卷 卷數多きも
- 世間の教よかる書 十後 卷數多きも 百後

但 人は益なきことをよく 非

- 一 父母親友法界のため 經 とよむ 一卷
- 佛名紙とわする 二後 ○礼辭 百後

但施物を受るものも若くあつた

○自分れおるせば經一卷佛名を及れ百拜一若

一君父母乃至法界衆生のおる齋と没け佛を百錢

○壇に登り法と施一若但施物を受るものも若くあつた

○世間の災難のおる腹痛と掛ふ等の祀ととも入用百錢

一大乘の經律論と講譯と聽衆一人人教多くと百若

○二乗抄よひ人天の書聽衆十人人多きも八十若

但禮物を受ふる等のためにとれば若くあつた

一正法を説ふに付て其実を聽聞一席

一僧來りて食を乞ふ代書とれば三僧

○け方より振きてのふ二僧

○供養を寺へ運び送る一僧

○信心より僧へ招請一僧供養せば一僧

但再三のれよりて無校あつるものも若くあつた

僧衆をせむる一人但一人のらぬ僧方一人若くあつた

佛の慧命とほ一人若く衆生と利益を一人若くあつた

○義をたき一人のれを守ふ一人

○但義とあき一人但一人のれを守ふと得る一人

雜名類

とふよりきたる一人白く一人○りて一人

またさ物をりゝべ 百發
三發
○ 困窮の角 いざな かなうべ 百發
三發

男女の急事に成守してをまゝに
又十員

人ぬかりに物紛れを返して時日とをさへ一著

人々代々うゑに備金成いやくぎんはくちひ之を百一若残

山林園地をゆづる。作徳をゆづる。一徳分。百錢。一畧。

家業はゆゑなくよくある妻をきびしくを

○内のも乃下女お若きで心を洗けよくあは

とさうとてくしくぐりに腹をたたくべし

くよ。てんゆくやうに。くびもをへ心乃より

る
う
ぬ
ら
び
く
一
号

人をよく令根とせしむる者根功徳をうさしむる

者^{もの}・ある^{ある}・一^一・百^百・後^後・
但^た・己^己・が^が・名^な・受^う・に^に・押^お・付^つ・き^き・し^し・る^る・は^は・若^わ・ん^ん・あ^あ・る^る・に^に

一命を以てぶ訟をたてゝあはむうゑ
○争論あそと和睦わもく乃

挨拶をなさず
個々、禮物を受るゝ。昔にありし

至徳のこゝろを出入

但揚震云天知地知我知海知人知

人の言事コトをえく我もふらばモ外ソノにニ著ツ

○
 造あま七知_りて改_めむ

評議ひやぎ談だん合ごうの席いしきより自い言ごの了りょう簡かんを去さひつゝの了りょうる

煙乃よりーきんきでぶー一袋

一よき人をあげ用也十善 ○何人ともをひ退く一人

○人の善行をめさむ一人 ○人乃道をばしらべ人の悪をいふ一人 ○人の悪をいひふりつゝのをさむ又善

一りよく此賢者の人をうやまひ供養する一人

○よれ人とあらざり毀るをさむ又善

一人を諫めて悪心を改めさむ一人

一人の家業を成就せしむ十善 ○一人の学業を成就せしむ二十善

一なごらに義を守りて心よゆき世を人知れども愛せむ十善
但さきさう 季き礼れい 劔けんを掛上かかまかけて教なぐさなり

○約束せしむと堅く愛せば身命しんめいはひて義を守る百

○義理ある財物を寄託あづかられしれども何十年たつてもし義とわづまひり終末しうまつを責せむ人を百後ご

一恩をうけていさむれくみなく必かならずさう一人

○恩を報はぐむはよ受うけるふとよりいさむ十善

○うらみめとともむくつ一人

但しるふにありて私の恩を報はぐむは善なるべ

一綴つづりと抄しやうとある衣服いふくを着る二善 ○麻服まふく 一善

但しるふよりお急いそぎの衣服いふくをきぬは善なるべ

○まづいふ求もとむるふにさるるを善みしむ

一肉食する人食を減背せば一食

○常膳ぬの人食を減背せば一食

但食するを糸ど力なりて減せざるにあり

一穀をてい其肉をうづぐ一食 ○穀をてい其肉をうづぐ一食

○我を御食應たけに穀をてい其肉をうづぐ一食

一人より無理なる事とてうけてよくめんふんと一食

一抄らるる物をいろいろに代物一食

一適る我よりけ功を人よりけ功一食

一玄あいせりよる悪きも我より限りやまんど天より

まうせりむさがる人一食

一我の人のためなるをいひて我の人のため

一のいひたる地一食

一我財産の多くも人のためにせむ一食

一利をうけりいひたるの意難くあふ天をうけり人を

とがめりてきりいひたる一食

一いけぬえをうけり等の意き願ひをいひ一食

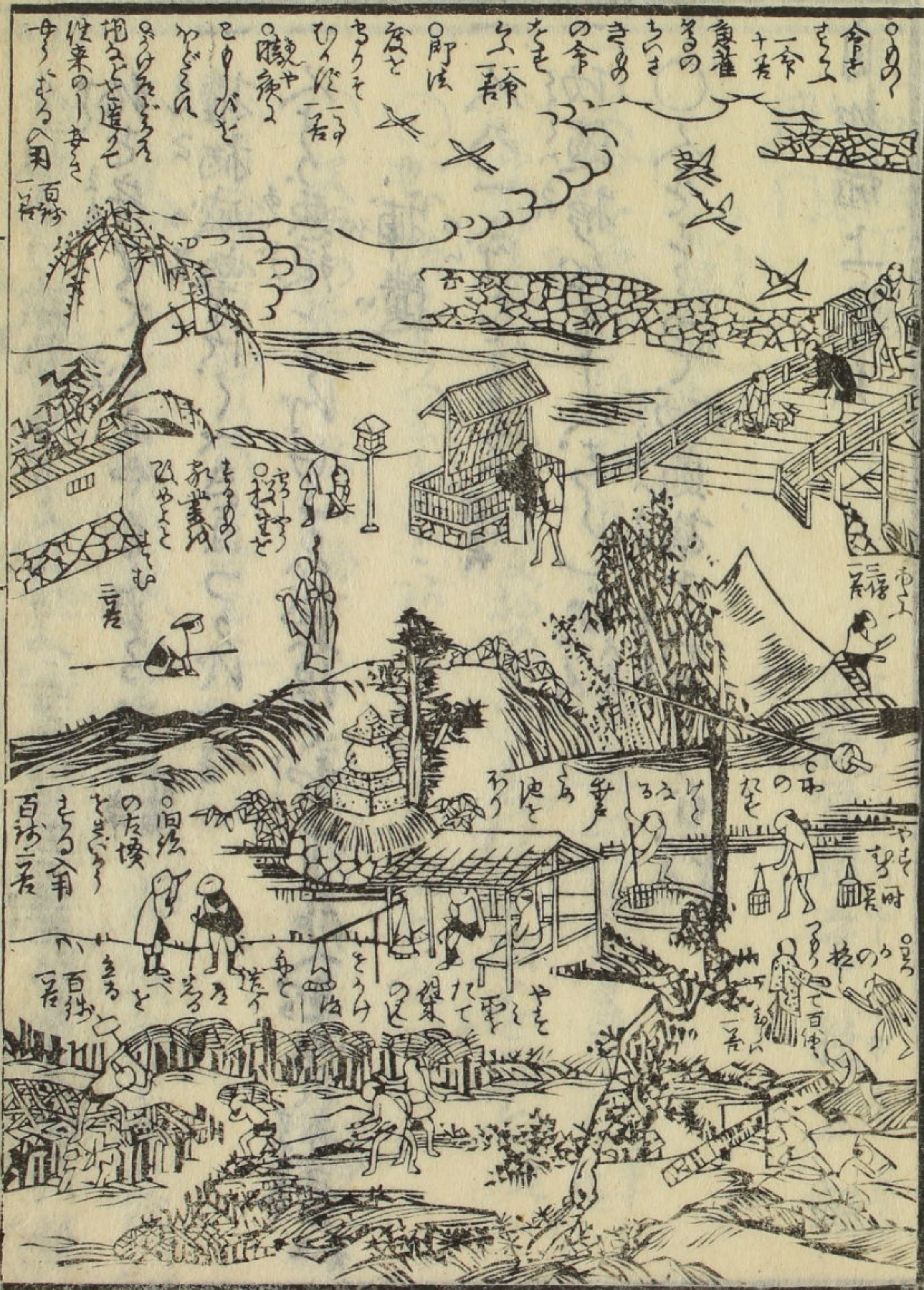
一人の身命を保全する書物とて一食 ○病を治す薬法一食

但れ物をうけりてきりいひたる一食

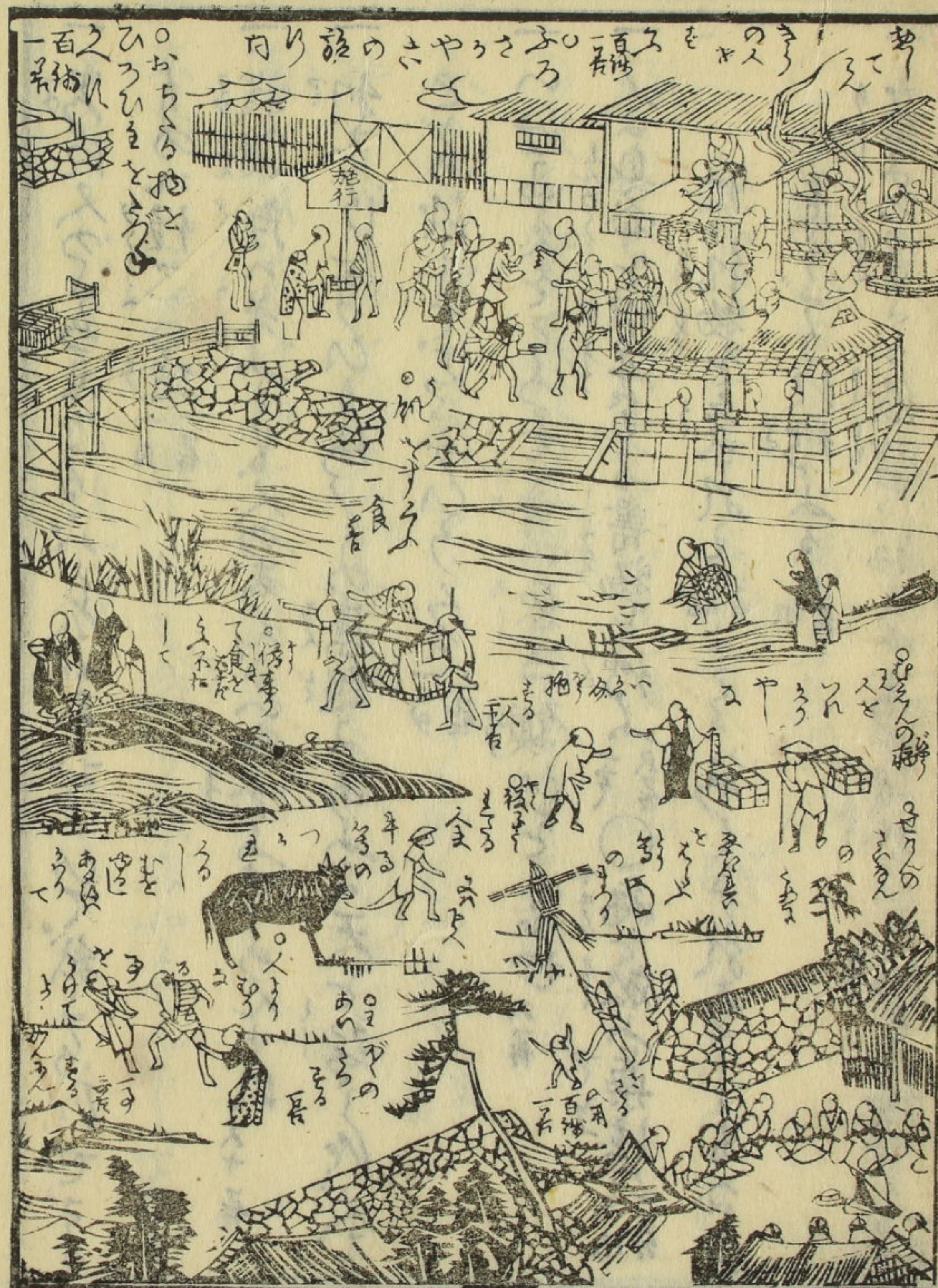
をうけりてきりいひたる一食

一文字の書る紙路に抄りてある紙拾ひてはる紙一食

十八



和字功過自知金



一金狼あり威勢ある人ばふぶるれ其勢ひを見せん儉
物と守りてかぬやとんぶる者一車
十長

一擁柄威勢はくべきふつう十長

一人より悪狼とふべけるは悪狼と知てへ外へむり棄て
三

捕遺

一人乃一命をともふ百長

一功遺捨死をへむしむ一人八長

○人をともて功遺捨と知てへ一人五長

自知録上巻終

自知録下巻

過門

不忠孝類

一父母を中かひて敬る一車
十造 ○父母のいふをきう一車
十造

○父母をいり給ふ時、母のいふをきう一造

○不忠をいふ言をきうしてさう十造

○父母のいふ言をきうとさう十造

○父母のいふ言をきう十造

○父母のあやまちを耐心をきうして保むべきを保め一車
十造

一継父母 養父母 祖父母 舅姑等一造

古杭雲棲寺 孫宏輯

一 主人よりつるまこととせしむる 一造

○ 凍へきをいさめば小事 一造 なる 十造 極大事 十造

一 國王の御法度をまゐる 一造

一 師匠をうやまつ 一造 ○ 師のよさをしへと見ひ 一造

○ 師よりむく 三造

但 師匠水道なる 一造 ぬあ 一造

一 兄弟いふ 一造 ○ 異父母の兄弟 一造

不仁慈類

一 人の重病とふべきを救 一造 ○ 経きやす 一造

但 多き人より 一造 け 一造 ぬ 一造 ぬ 一造

一 毒藥を調合せし者 一造 ○ 人を害せんとする者 十造

○ 人の一命を害せば 百造 ○ 死 一造 病 一造

一 衆法の志をき 一造 ○ 衆 一造

一 父母より 一造 ○ 一命 一造

一 車を 一造 人の 一造 人の 一造

○ 答刑 一造 ○ 杖刑 一造

○ 答刑 一造 ○ 杖刑 一造

一 心中 一造 一人 一造

○ 事成就せば 十造

一 人を 一造 ○ 一命 一造

○今よりさうするは

一 牛馬等の人にさうするはけりもろをさうするは 一命 二造

○あやまりてさうするは 二造

○人はさうするはけりもろをさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 二造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○人にさうするは 一命 十造

○人のさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○けりもろをさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○神をさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○人をさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

○あやまりてさうするは 一命 十造 ○あやまりてさうするは 一命 十造

一 食物みいきつ所のを煮こやしやきとりてむとせ
くろく一 瓜受一 む 一 命
一 産子瓜なるらむをうけ産子物とて瓜討ぎげはひて
死せば 一 物 ○きづゆへり死せば はるのせうしゅう
○虫のきおりのとあひき絲とをゆへりし虎をうづ
窠をくぼり卵をとりてらめれとやぶる 日一
但一とつて路次はくろ寺院を誤れんや
とるるどろろく乃若るまゝとぬれを授るはるる
らば道にけりて懺悔退後とべ
一 ちを龍み入と中ちひくは一む 一 日

一 生所ふりの死をえくふはしとろく海をゆとる 一 道
一 宗族をばしめ朋友ふたのむおなき困窮の人乃飢え
と海をえくふとく 一 道
但 我身なるまづ一々い道みあふ
一 智人じんが病人愚人老人小児を てうしゅう 一人
一人の憂るべきをえくふひるる 一 道 ○うへくこ
う 二 道 ○なと其うへるる 二 道
○人れ利をえひ名けしあふをえりて心けし 二 道
○人の常とてあふ悪てあふふんこと 不 道
一 凶年 きんねん にあふりて人を救ひ そく 又 十 道

○人の夢をうむ 一冊

一 夢をうむかゝる物を強く併て其人衆人とわく 一冊

一 人より及ぶ牛馬を埒ひつゝいゝゝゝびと版とて 一冊

一 勢まばむにつゝ 一冊 ○それうらゝく 一冊

一 人を握あばき人の背をとつ 一冊

○人のけうをつゝ 一冊 一冊

○權威をりて人の田地房屋を賣 一冊

○日く強て下をみ 一冊

一 ひとりゝ半馬の姓をよやま 一冊

○橋渡船井戸人の中よりゝ半馬の姓をよやま 一冊

一 一の級人みどりいれ級人の出世のふさまゝ 一冊

○法をまげ 一冊

一 一の級人みどりいれ 一冊

一 婢妻より 一冊

○人の妻女み 一冊

三宝眼業類

一 佛がさうのる像瓜そこないやぶらうる系 百後 二造

○ 诸天若神聖賢若多等の像はあふれ不 百せん 一造

但 邪法邪神なうは造れあふ

一 佛がさう羅漢をぞしる 一言 又造 ○ 诸天聖賢等 一言 一造

他人のまよいととふ其実を識よう出るは造あふ

佛をれとふ時をじちふ 一造

但 病きによう又いふき用るにすは造あふ

○ 婬酒等のあに時をじちふ 又造

○ 六齋日ハ一修けふ

但 六故日をせし在家の者の眩むべき日ちうるあふ

かくれおろし論ぞ八日十四日十五日廿三日廿九日卅日

小の月なうば廿八日を加ふ

一 寺院寺塔瓜をとり佛具法器等とそこないやぶと

あふれ不 百後 一造 ○ そこないやぶ者を見ぬがう煉め

ともし 又造 ○ かくるもほしむを 十造

诸天若神の中流等 二百後 一造

但 邪神淫祠の世の人とまどつ人者ハ造にあふ

一 三宝れ地瓜賣らばあふ不 百後 一造 ○ 寺院の建物を臺 一

一 經をそともしやぶる 百後 二造 ○ 二乘人天の論 百後 一造

一 佛經をそしめる 一云 ○人天の書物 一云

一 法を抄んでそしめる 一云 但被抄ゆる是なるいふ

○若法の意をまじしていれりぬ中うけをたす 一云

但邪文を誤る詭計の道あり 一云 若法をねり

ふくはむき時ふくはむき止するの道あり

一 誦經を一字よりたぐる 一云 ○一字より抄る 一云

○心は余りまじりえ抄り 一云 ○惡多を抄り 一云

○經をよりより外のものを 一云 ○長々と偽る 一云

○法式よりいへるよりて廉潔にして誦 一云

○誦時眼をそしる 一云 ○人をそしる 一云

○人を 二十

一 佛經をよりより著 一云

一 法を説く見識を授け祖師先賢の心を教へ徳を 一云

一 ちの文を中り教ふるの書物を造る 一云

一 佛をよりより邪法を抄り 一云 乃惡方を

一人 一云

一 在家に僧の食を乞ふ 一云

○食を乞ふて乞へり 一云

但出家するものいへる一倍 一云

一 悪女子を夢み退治せし人 一人 ○ 女子遣あれども教へ
いふうけゆる 一 大 十

難不苦難

一 老よりき金銀ととり 百後 ○ 富貴に身とて 百後
あんなるやと交合し 一 厄を犯し 二 身持をわく 二 婦を
ふとれ 八十 ○ 意みあり 十
○ よきあがりの娘をわく 八十 ○ 意みあり 十
○ 老より女 十 ○ 花女 十
但 八十 の 八十 の 八十 に 八十 論 八十 限 八十 み 八十 び

○ 出家の身とて 八十 不義 八十 何 八十 の 八十 親 八十 疎 八十 貴 八十 賤 八十 と

論 八十 せ 八十 ん 八十 ○ 意 八十 又 八十 思 八十 又 八十 十 八十

一 壯即遊女等のうれ 八十 る 八十 者の 八十 者 八十 と 八十 へ 八十 を 八十 く 八十 一人

一 財寶を盗え 八十 一針一葉一錢一毫一造一

○ 役人 八十 と 八十 け 八十 は 八十 年貢 八十 を 八十 う 八十 る 八十 ぬ 八十 る 八十 百 八十 後 八十

○ 權威 八十 を 八十 へ 八十 押 八十 へ 八十 する 八十 欺 八十 して 八十 五 八十 百 八十 後 八十

一 初 八十 終 八十 け 八十 て 八十 人 八十 を 八十 里 八十 人 八十 せ 八十 人 八十 の 八十 罪 八十 を 八十 ゆ 八十 る 八十 百

○ 初 八十 と 八十 け 八十 人 八十 の 八十 官 八十 を 八十 押 八十 し 八十 金 八十 銀 八十 又 八十 金 八十 十 八十 後 八十

一 ひ 八十 の 八十 金 八十 銀 八十 と 八十 け 八十 人 八十 十 八十 後 八十

○ 他 八十 の 八十 金 八十 銀 八十 を 八十 う 八十 て 八十 主 八十 の 八十 死 八十 ん 八十 る 八十 を 八十 教 八十 又 八十 十 八十 後 八十

一 井幹等がゆく出づり押し入代物百後

一 人をさういひげをさす ○うつて綴るを押し十

○悪をさす其不承をさす一 ○及て助とを十

○人の悪をさす一 ○人の悪をあらん百

但止るをさす對案を及びた理の強く不承中百

おも罪と物とをさす一 ○害をのぞく人を

さすふたつふたつ造り百

一 人の賢者のあやうをさす一 求めて新説をさす

ら一 ○理にさすきたる一 ○及双紙狂歌など

を造りて人をさす一 中一

三十造

○人の密をさすを実をさす一 ねえいあつて百

○金くさきものをさす押し一

○人の悪を書きさす一 其事をさす一

わ一 ○金くさす一

但一言もさすなく云の心より出て人の害をさす

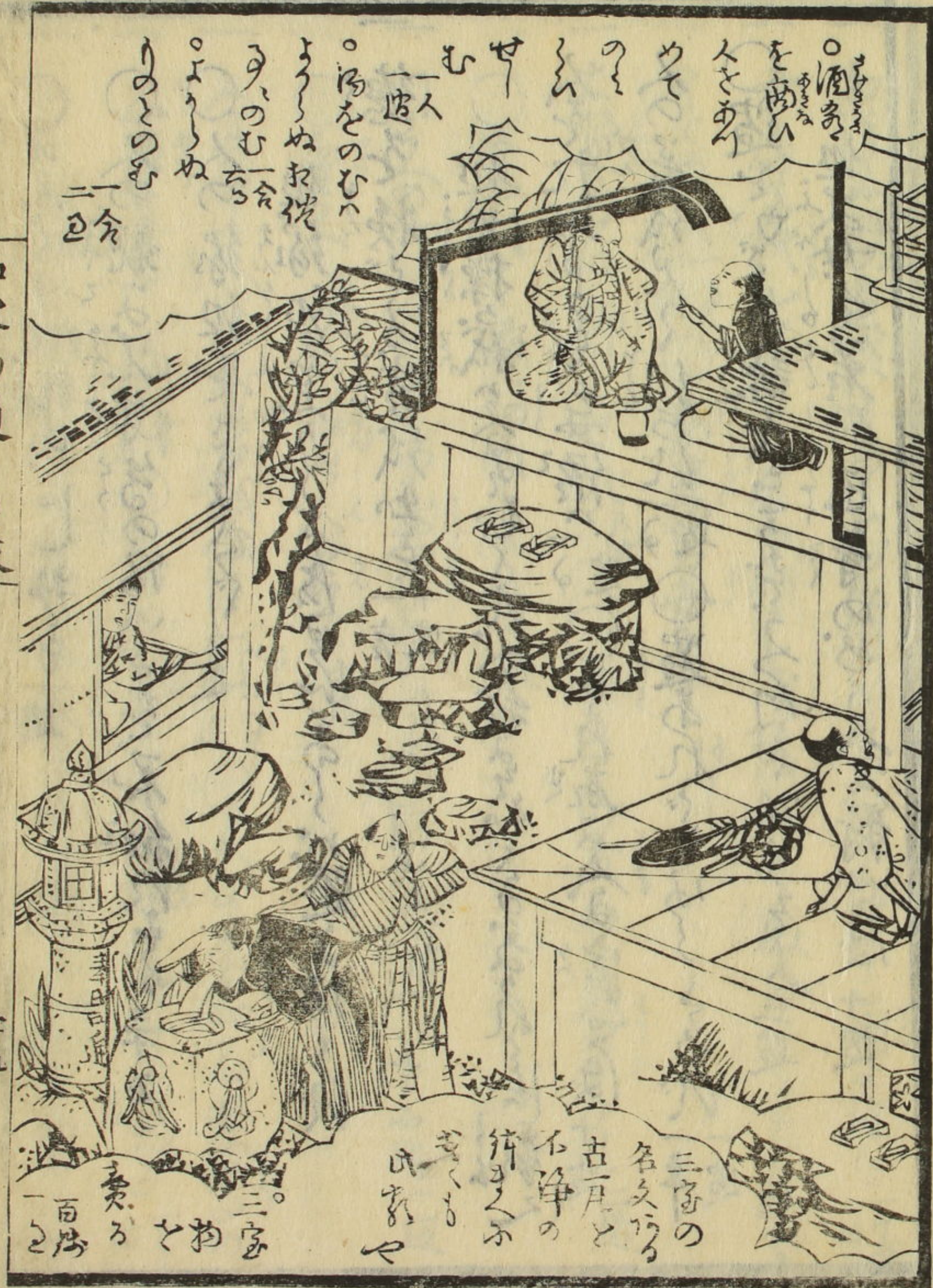
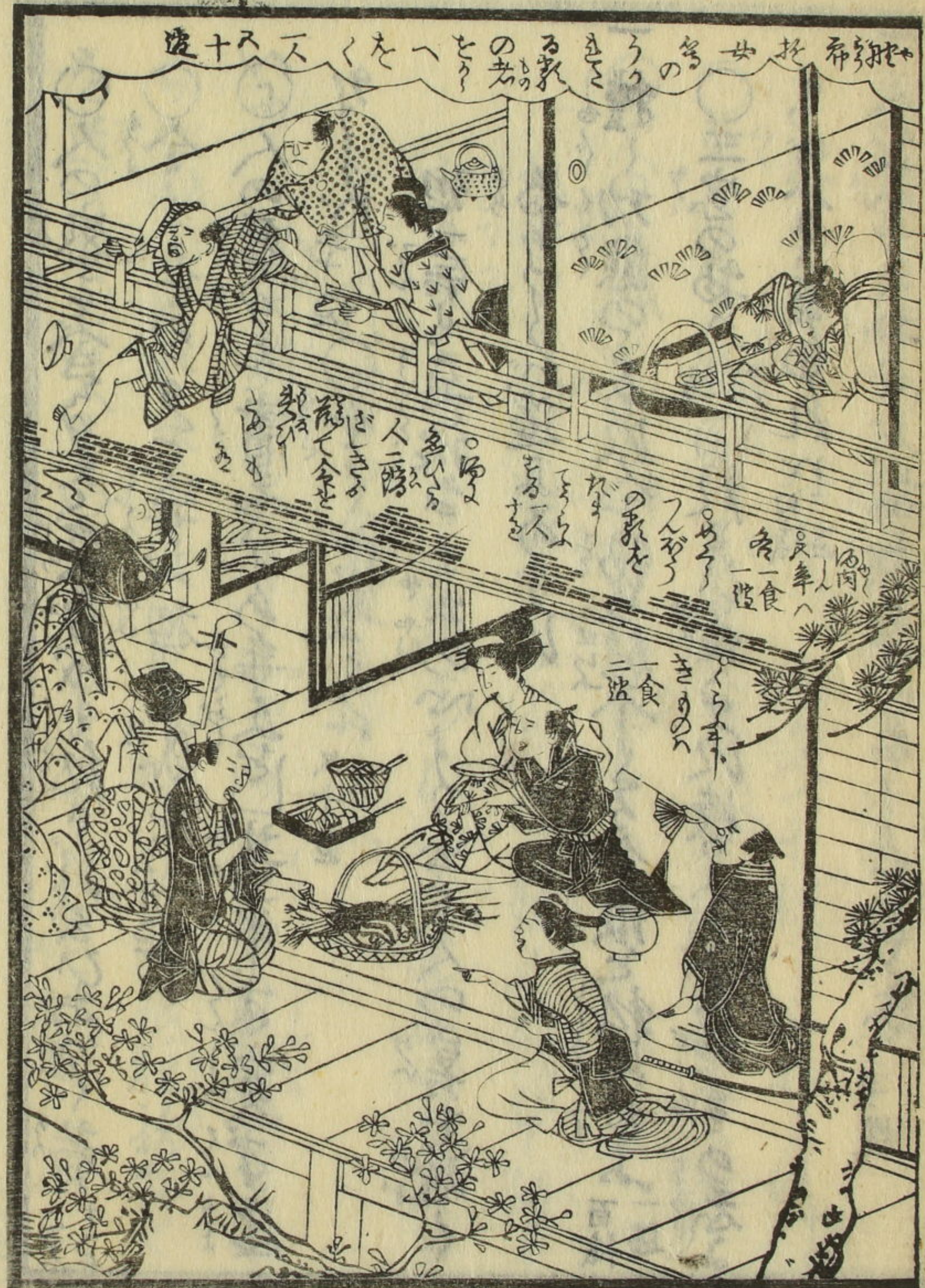
おも一

一 種く功徳のあらん人を物にさす一 金銀を私用を百

○三字の物一 ○たといさすにさす一 造るの志は

ちがふく用ゆれ一

人の命令をさす訟詔のどを一 とさす三十



○人くまに論のこし妙と一造

○人の親子兄弟等の何いごを不和れとる 三十二

○人の縁組をさましくとる 一造

但縁組さへうごさうけあへば造はあへん

一 徳を授けざる言ひ出さ 一言 十造

但曹操が我をさへむく人我をさへむく人我をさへむく人

一 人をたぶらうとて安んずる 一造 ○それある人安んずる 十造

一 人の言ひをきく 一造 ○適あれども 一造 一造

○造とて 諫をきく 一造 一造 一造

但父母兄弟師友等の 一造 一造 一造

一 お後み 妙なり 一造 一造 一造

一 女房子代とて 一造 一造 一造

一 大賢人の師とせば 一造 一造 一造

一 大賢人の師とせば 一造 一造 一造

○うへへ 一造 一造 一造

一 同うの御方とて 一造 一造 一造

○聖人 一造 一造 一造

一 人をさへ 一造 一造 一造

一 大悪をさへ 一造 一造 一造

一 他人我をさへ 一造 一造 一造

一 ちり致を造りて人必捕獲をうめれ一人

一 うそい一言 ○自ら成ゆめ悟りうそをて人を惑ひん 一言

一 約法成るゝいふ一造大事 十造 ○寄託る財を 百錢

一 恩をうけて報せむ一造 ○寛ある成るゝに報を日一

一 いふとて寛と報せむるゝ又二造 十造

一 ○我みうゝある人の喪成めと解るゝ思ふ一造

一 うゝゝあふ人のちうびる成までいふうゝゝ一造

一 肉食一食 ○うゝゝき肉一食

一 但市うて買求めて食ふと謂之義自ら殺して食
を茶の殺生の中は論どるゝ

一 酒をのむといふゝぬお徳ゝのむ一合

一 ○よろぬ者とのむ一合 ○あちうゝてのむ一合

一 惣毎の中らひのゝあふ人餐食のゝあ病を療

一 ちあふあちうゝに造みあふに

一 酒者を商ひ人とうびにめてのゝひせ一合

一 五辛をくらうゝ一食 ○食して後二誦經一卷

一 ちくゝむさ日肉と食ふ一食 ○食して佛殿を掃

一 みのぼる一造 ○酒とのゝ五辛をくらうゝの 日一

一 ち今の炙服一衣 炙食一食

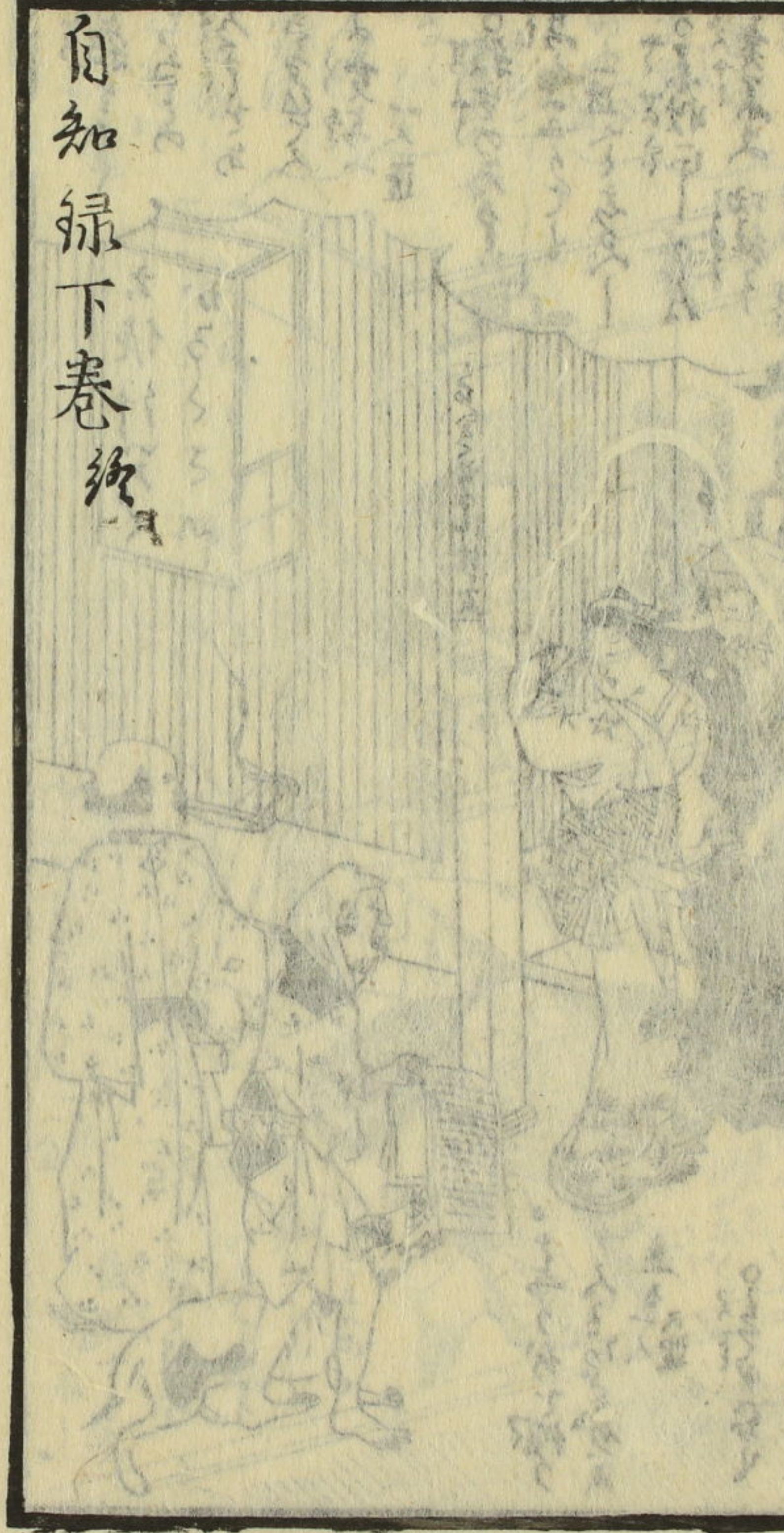
一 但父母なふゝ造あゝに其外佛神は供へる

物とて身みの分限ぶんげんはお應おうせされぬれいの者ものなり
 米麦こめあわぎをにじめ五穀ごこくの天てんよりれたまひのちる紙しをまゝ代物だいぶつ百後ひやくご
 殺生ころしやう糖蜜とうみつの道具どうぐを商あきなひひ人ひとを賣うあつて代物だいぶつ百後ひやくご
 ひろひふりのをまゝ久くさば代物だいぶつ百後ひやくご
 破やぶれぬれぬれに遺あまらば金かねなり乃すなはち一事いちじ
 欲心よくしんは種しゆくのもくもくをて罪いざみ義ぎ罪いなり乃すなはち一事いちじ
 衆しゆにまどつて己おのれがむろを思おもふ衆しゆのふをおも
 りぬりの居や所ところ不ふの地ち一日いちにち
 一人ひとりの財産ざいざんをけしむ家のほづれるもうまらば我われひと
 手て換かをせぬ家いえなまゝとせんといふいふ事こと

利りをけしむふりうくのちんぎよあふ時とき我われあつて
 ちを思おもひた神佛しんぶつをうゝ人ひとをどぐむ三造
 文字もんじある紙しゆちてけり紙しがまりた十造
 けり銀ぎんと知しりてけり百後
 補遺ほい
 香かうを供くげん地ちと持もつて佛ぶつと拜をせざるふ安やす堂どう塔たつ
 のよに登のぼる三造 ○伽藍がらん殿堂でんどうのよにて魚肉ぎよくとらふ十造
 礼物れいぶつをとりて諸役人しよやくじんのみきふいゝて人ひとを身みさせぬ
 罪つみをうろくぬやうに世せ法はふなかりの百後
 ○何なんと人ひとをきくせ人ひとを罪つみとけり等らうの世せ法はふ

とともその其の成就せしむる衆の重軽と不論入百海
 一 自身功過格紙（一）も人みせしむるものと思ひ三十
 但勤むれどもをさるるに違ひあり

自知録下巻 終



附録功過自知録大意

一 凡人の世は貴も賤も其の以て應じ心願
 多うべし。若し其のいふ所を必しも心を
 いふ身を勞し。成就せんことをしむれぬ
 及びあひも佛神といふ。諸天に祈言
 する。百日十日あらしめんと。其の功利を
 を得ふや。やど唯一心ぬ。此功過格紙受持
 一。若し其の或い五百或い一千。三千。五千乃至
 一。万にも満せば。禍のぞく後来りていふる。おひ
 のぞく。成就せむとある。

一 功過格と修せん人も我々も信仰とは佛
 神の御前を今までの悪事と懺悔し一心
 二 祈誓とけ新しきものをやして祈れどし
 三 其報恩といえ三千の善行なり。又、神佛
 の御恩は報せんと思ひをなすべし。さて其日
 より本文あり。教へる善行と考へ我力
 四 する所の善根をなす。毎日寝るより一日の
 善く悪くを換算し書付る。又、毎月朔日
 五 又、神佛の御前へ。その月分の善悪を述べ
 六 算用とす。たゞ人を悪を三つあるとも。善

を三つあるが、悪も三つあるなり。善を三つ
 七 あるとも悪を三つあるとも。其善むはし
 八 きなり。十の善行あるはとも。悪を三つある
 九 善は三つの善なり。善を三つあるとも。三つ
 十 みる善あるは三つあるなり。又、三つある
 十一 善あるは三つあるなり。乃至百に及ぶ善ある
 十二 べし。三つあるは百なり。悪も三つあるは三つ
 十三 本文あるは三つあるなり。三善あるは三
 十四 七善あるは三つあるなり。三千の善根と圓滿
 十五 する心ざし。善あるは三千の善あるは三つある

成就せざらん。王が縁がよきなり。ひ三子の若も、神佛への報恩なれば、親ひうまひ、後いよく、励うまむとて、やうふ三千の親を満まんてる。三千の教満うまてる。知識をたの、回向を法ほうとむ。一哀あはれ了りやうん云うん谷ぐ會かい禪師ぜんしは、あひしとき、禪師云ぜんし天命てんめいは、已いより作つくれべし。一切いっけつ乃なり福ふくも、福ふくも已いま求もとむ。若生じやくの定じやうまれる天命てんめいも、今生こんじやう已いまあひし。天命てんめい忽いち變へんト。我われの福ふくをあふ、あひし福ふくをたふ、あひし。

我身われみの親おやひの若わか惡あくの外ほか、別べつ又また天命てんめいを論ろんぶ。どうして功こう過か拾しやく一いつ冊さくを授さづけ、後あと来き乃なり罪つみを懺ざん悔かいし。若根じやくこんを親おやひする、これとも、堪かん忍にんと第一だいいちとし、よく心を法ほうれ、ことと教きやくへ、人ひとより深ふかく信しん受じゆし。あまづ、折せ云うん親おやと立たて、三千の若わか親おやを修しゆし、それ、及およ第だいの大だい願がんを成就じやくじゆし。又また三千の若わか親おやを修しゆし、それは、我われの、子こ孫そんなき人ひと相あひなれども、則すなはち天てん啓けいとし、男子なんし出い生しやうし。一いつ萬まんの若わか親おやを修しゆし、それは、寶ほう地ち縣けんとし、不ふのな、若わか親おやあり。計けいし、五十三ごじさん歳さいの

命^{めい}尼^にとあり。七十歳^{しちじ}又^{また}抑^{おさ}ふびてもつが
まうも。ちり。是^{まづ}全^{ぜん}く心^{こころ}澄^すあう。願^{がん}心^{しん}堅^{けん}固^こ
わ。あえ。れ。ば。功^{こう}造^{ぞう}格^{かく}を修^{しゆ}りて。明^{めい}徳^{とく}と明^{めい}
ふ。と。人^{ひと}我^{われ}百^{ひゃく}人^{にん}富^ふ貴^き。幾^{いく}多^た家^かと。の。ふ。を
あ。て。天^{てん}堂^{どう}も。地^ち獄^{ごく}も。け。秤^{てい}量^{りやう}。毫^{ごう}毫^{ごう}も
た。ぶ。り。な。し。此^こ功^{こう}造^{ぞう}格^{かく}も。う。り。造^{ぞう}化^けの。を
と。ち。り。て。綱^{きよう}を。の。ぞ。た。後^ごを。あ。え。た。ま。う。と。
作^{さく}の。お。く。と。云^い。

一 此^こ功^{こう}造^{ぞう}格^{かく}。疾^{やく}い。う。り。を。と。る。ら。我^{われ}は。愛^{あい}ふ。金^{きん}字^じと。化^け
し。根^{こん}字^じと。化^けと。と。ん。く。足^{そく}成^{じやう}の。子^こを。ま。う。う。り。

其^{その}外^{ぐわい}靈^{れい}驗^{げん}。奉^{ほう}て。う。ぞ。人^{ひと}の。う。

一 日^{いちにち}の中^{なかつ}。と。十^{じゅう}余^よ功^{こう}の。若^{わか}く。を。終^はひ。積^つん。ぶ。
す。月^{げつ}み。あ。る。ま。で。純^{じゆん}心^{しん}は。少^{せう}く。も。退^{たい}屈^{くつ}さ。く。は。と
む。れ。と。れ。と。本^{ほん}等^{とう}の。功^{こう}の。外^{ぐわい}は。別^{べつ}に。加^{くわ}え。く。
十^{じゅう}功^{こう}と。あ。る。ん。ど。し。是^{こゝ}も。純^{じゆん}心^{しん}は。貴^きい。精^{しやう}進^{しん}
の。一^{いち}秒^{びやう}を。大^{だい}功^{こう}と。と。れ。こ。と。を。あ。う。り。も。乃
ち。う。り。の。あ。り。其^{その}間^{かん}は。抑^{おさ}ひ。く。一^{いち}兩^{りやう}日^{にち}も。抑^{おさ}
急^{きふ}と。は。こ。と。あ。う。り。す。月^{げつ}み。う。り。て。も。別^{べつ}に。
功^{こう}を。あ。う。り。な。う。り。一^{いち}日^{にち}十^{じゅう}功^{こう}な。う。り。に。す。
月^{げつ}み。又^{また}増^まを。記^きと。と。れ。一^{いち}月^{げつ}は。三^{さん}百^{ひゃく}二^に十^{じゅう}功^{こう}と。

あふふ一ツツ十功二十功にもあふふ
あふふ一率ふふ六千功ふふあふふ
ふふ積むことい甚中ふふあふふも悪
ふの方をも又嚴重ふ。微ふ。乃遣をもふ
らふあふふふ。若功を記ふふふあふふ
らふふふ。遣要をあふふふことあふふ
ふふ

一 吾所棲こゝは。まゝ日圓れ。新ひて。金銀と異
 ひ。たへや。まゝなまき。由人。異し。と。族の男。殊乃女
 まゝでも。新ひて。安き。なり。

一 皇太子母ふとてやと最るを終へしむる故十
 最とて人ふ勅むるを一最とて最父の我とふ
 えて我を輝んと人なり人勅化しむる
 化人の勅化しむる易きなり
 一 凡悪逆五道の物なり其罪重くして量れざる
 うにけ書を以て受おとふなどの人柄み
 入べきにありにゆり此書又載せむ
 一 蓮池大師云功造格の利益も現在の華報之
 と人もとてなり来世の果報となりて功德
 たりなり

一 本文は百文を以て一冊と一遺とをなす
 あり。祖傳先生云、永樂後百文とて、今乃
 後とて、又百文とあり也。或は永樂後
 布毛綿など紙出たり。代物の重なり
 算用とす。
 貴賤僧俗等のまうらひより、善惡の條
 通用し、むねのまづらひきと惡と
 善とを記し、善門惡門の八類。本文乃
 次ぎみ順にて、よくあんでこれを講とす。
 うりても私意を添加せしむ。善惡

の輕重、實に天の所定なり。抄るる
 みかりなるべ
 功造後、受おる人、毎日此書を
 日、の功造明らうに記す。善い書は
 淺く、あやうく、例とて記す。一月乃
 廿日、み善造と、おくらふ。多きを、年
 終り算用して知るべし。

拾月之圖

如來を侍りてふる魚乃差ありてふれども魚と目付違ひ
名は自れより少く、魚と目付違ひ、又幼き幼きといふ理を
あつて知れども、あつて國を報知するはぬれども、
功過自知録世に行ふ事あり、今年書懸け
書りて座一本、座を撰て、きりて増南校訂ありて
國画を加へ、幼き稚子乃啼き、弄ひて、乃て書き
し、つづく、つづく、魚と目付違ひ、善を勧むる、一助ふ、
實政庚申正月

實政庚申正月

沙門源無識

